



授業参加者の一部で上演、その余勢を駆って2月には学外の小劇場で発表会、安部公房の『友達』を上演した。上で述べた場所の問題は、学園祭で上演という形で解決し、学生たちの熱意が教師を動かして外部の小劇場を借りるといったところまでいったのである。

2年目の前半は、自分でシチュエーションを決めて、歩いたり、物を見つけたり、人と出会ったりといった、かなり実際の芝居の稽古に近いものを中心にした。また、「笑い」や「怒り」を段階を付けて表現するとか、日常的な行為を意識化する訓練も多くなった。後半は、一部の学生は『部屋』の上演に取り組み、その他の学生は、寸劇を演じることで演技に慣れ、『友達』の上演につなげていった。本を読まないと言われる現代の学生だが、いきなり謎だらけの戯曲を渡されて自分なりの解釈をする事を迫られる。何しろ、演じてそれを見る観客にわかってもらわなければならないのだ。当然、他の役者から意見も出るし、ディスカッションをしなければならなくなる。言葉の意味や、その戯曲が書かれた社会的、歴史的背景にまで踏み込まなければならなくなることもある。実際に稽古をしていたときには思いつかなかったことだが、いわゆる不条理劇の系統の戯曲を選んだことが今にして思えば良かったようだ。簡単には意味がつかめない戯曲であるために、あれこれと議論が繰り返された。こうした戯曲を選んだのは井山氏の功績である。

3年目の今年は、だいたい2年目と同じスケジュールで授業が行われた。学園祭での上演は、授業のメンバーからはかなり独立して、学生の自主的な公演になった(寺山修司『犬神』)。2月の上演は、やはり外部の小劇場で、別役実の『ジョバンニの父への旅』であった。

今年は他学部からの聴講者もあり、工学部の学生は機械に対するマニアックな関心を見せ、例えば音響の面で様々な器具を用いて効果を上げ、人文学部の学生

たちを驚かせた。逆に、細かい表現まで注目して戯曲を読み込んでいく人文学部の学生には彼の方が驚かされていたようだった。

さて、最後にこの報告をこの年報に掲載させていた理由について、まとめておきたいと思う。大学に入学したばかりの学生は、高校、或いは予備校での、大学に合格するための知識をとりあえず詰め込むという授業に慣れているであろう(もちろんそうでない学校、学生も存在するであろうが)。自分の意見を発信していく、或いは自発的に調べるという行為を必要とするこのような形態の授業は、むしろ教養段階で行い、学生に「大学は高校とは違う」という印象を持たせる方がよいのではないだろうか。

勿論、こうしたことが学生にとって苦痛であるならかえって逆効果であるが、共同である物を創っていくという行為には学生達も喜びを感じるらしく、教師の指導以上に自主的に取り組んでいくことが多かった。例えば、今年の2月に上演した戯曲は、表題からもお分かりのように宮沢賢治の作品を下敷きにした物だが、かなりの学生が教員が指摘するまでもなく賢治の作品をいつの間にか読みなおして、戯曲の台詞の解釈に役立てていた。そして、稽古を重ねるうちに、そうして得た知識を互いに披露し合いながら、自分の表現能力を高め、かつ全体の演技の水準を高めていったようだ。

このような授業は、どんな学生にも有効か?と問われれば、否定的な答をせざるを得ない。教員の力不足もあって、かなりの学生が途中から出なくなってしまいが、このようなある意味では掘みどころのない授業について行けない学生も必ずいるからである。そもそも、本当の役者になる学生は減多にいないわけであるから、授業としてはどこまでやるのが最大多数の新潟大学生にとって必要なのか、それを見つけることがこれからの課題だろうと考えている。